The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	志賀直哉「或る男、其姉の死」の表現構造 ： 芳三の語りを中心に
Author(s)	尹, 美羅
Citation	阪大近代文学研究. 2021, 19, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81788
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

志賀直哉「或る男、其姉の死」の表現構造
――芳三の語りを中心に――

尹 美羅

はじめに

「或る男、其姉の死」は、大正九年一月六日から三月二八日まで、「大阪毎日新聞（夕刊）」に四〇回にわたって連載された、中編小説である(1)。志賀直哉にとって初めてであり、唯一の新聞連載小説である本作品は、それ故に同時代評の対象からは外れることになった。

志賀は本作品について、複数の文章の中で、同じく父子不和を扱っている『和解』と「対」(2)の形で繰り返し言及している。まず、「創作余談」（『改造』、昭和三年七月）と「続創作余談」（『改造』、昭和一三年六月）において、「事実」を書いた「捕りたての生魚」に『和解』を例えたのに対し、「或る男、其姉の死」は「同じ魚の干物」で、「事実と作り事との混合である」ことに触れている。また、「岩波文庫『和解　或る男、其姉の死』跋」(3)においては、次のように述べている。

> 「或る男、其姉の死」は「和解」以前の事実を出来るだけ小説にして書いてみた。
> 前者は此事実を経験しつゝある間に書き始め、十五日間で書きあげた。作為もなく、さういふ方の苦労は少しもしなかつた。（中略）後者はそれから数年後に書いたものだが、形式に無理があつた為めか、大変骨を折つた。そして骨を折つた割には効果があがらなかつた。

ここで、『和解』が「作為もなく」作られたのに対し、「或る男、其姉の死」は「出来るだけ小説にして書い」たものであり、その「形式」のため、「大変骨を折つた」作品であるとしながらも、「作品の出来栄」については否定的な自己評価を下している。それから、「現代日本文学選集『和解』はしがき」では、「或る男、其姉の死」が「父と子の不和」を「主人公の弟の立場で書いた」ものであり、「姉といふ架空

な人物などを出して」「実生活とは離れたものにした」ことを明らかにしている。このように、本作品は、『和解』と同じ題材を扱っている作品でありながら、その方法の面では、志賀がより拘りをもって創作した作品であることがうかがえる。

しかし、志賀による「或る男、其姉の死」に対するこのような言及は、先行研究において、専ら作品の題材を父子不和という作者の実体験から取っていることに焦点が当てられ、「形式に無理があ」るなどの、志賀の否定的な自己評価も手伝って、失敗作と見做されがちであった。

下岡友加は、本作品が、作者志賀を介さない「独立した作品として読むにはいささか破綻をきたしている」とし、「成功した作品とはとても言い難い」(4)と述べている。須藤松雄もまた「感情、行動統一体としての肯定的な自画像を、一人称的実質において形成する」のが「志賀文学本来の行き方」だとし、「自己を批判的に三人称化して文学的決算書を作ることは、この作者には向かない」(5)と本作品の方法としての語り手の限界を批判した。これに加え、広藤玲子は「父子対立の事実を引証することにのみ使用されがちな不遇な作品」(6)として評価している。このように作家論的見地からの先行研究は、本作品が作者志賀を代行する芳行（兄）を、第三者芳三（「私」）が観察し、読者にその話を聞かせるという語り手の設定に限界のある、不完全な〈私小説〉であるという結論に至ることが多かった。

一方で、亀井雅司は、姉の死と父子不和の問題が内容的にどのように関係し合っているのかが描かれていない点を挙げ、「作品として有機的統一性を欠」(7)いていると指摘する。しかし、杉山雅彦は、このような父子不和に重点を置く先行研究は、作品の「総合的評価を否めてしまう危険性を孕んでいる」とし、芳行と時子（姉）における生と死という構図を通して、「或る男」の「再生」の物語へと読みの可能性を広げた(8)。この中で、杉山は芳三の「語る」或いは「書く」機能は重視されるべきであると指摘し、語り手としての芳三の役割に注目している。しかし杉山は、あくまでも「見る」存在としての芳三を強調し、他人によって語られたり「見られ」たりする存在ではないとしている。以降、語り手としての芳三の機能は繰り返し問われることとなる(9)。

このように従来の先行研究は、志賀に重ねられる人物としての芳行を、作品の主人公と捉えており、芳三の役割を作品の語り手に限定している点で共通する。これに対し、山口直孝は、「小説」を書く行為が芳行から芳三に移行していく局面に注目し、一種の役割交代劇として本作品を捉えている(10)。このような捉え方は、語り手としての役割に留まらない芳三の可能性を提示している点で注目すべきである。

本稿では、山口の提示した芳三像をさらに発展させ、単に語り手としてではなく、物語の主人公としての芳三の可能性

を提示する。これにより、芳行と作者志賀を重ねる形で〈私小説〉として読まれてきた経緯から、本作品を切り離すことを目的とする。

また、芳三の語りの方法とその語られる内容との関わりを考察することにより、これまでに問題視されてきた姉の死と父子不和という二つの物語のつながりの不確実性、従来の研究で考察されることのなかった祖父という人物をどのように位置づけられるかなどの問題が解決されると考える。

つまり本稿は、本作品を単に作家を知るための資料、あるいは単なる失敗作としてではなく、一つの構成的な文学作品として改めて読解することを試みるものである。

まずは、芳三が物語を提示する方法について、いくつかに分けて考察していくことにする。

一．芳三の語りの方法

まず、本作品における芳三の語りを考える前に、「或る男、其姉の死」の成立過程について見ておく必要がある。『志賀直哉全集・第二巻』（岩波書店、昭和四八年七月）には、本作品の草稿と見られる四つの作品が収められている。中でも、末尾に「大正三年二月十五日」[11]と執筆年月日が書かれた「或る男と其姉の死」は、決定稿に最も近いものであり、決定稿における【一】～【四】前半、【三十四】後半～【四十】に該当する。その一部をここに引用する。

而して彼は十五年ぶりで、彼の一人の姉の将に死なうとしてゐる姿を見たのである。（中略）病人が又何か云ひたさうにしたので弟なる男は顔を寄せた。病人は「本統に左う云ひに行つたのかしら？」と云ひながら、自分で起きてそれを云ひに行かうとした。

ここに、芳三（「私」）という語り手は見られない。ただ焦点化された「或る男」（決定稿における兄・芳行）が「彼」「男」として、「其姉」（時子）が「病人」として描かれているに留まっている。このように、兄と姉は、この段階である程度造形されている反面、芳三に限っては、そうではない。

この草稿の末尾の空白部分に「改造　中央公論　解放　新家庭　新潮　雄弁　二月末まで」と、いくつかの発表誌名が殴り書きで書かれているが、『改造』（大正八年四月創刊）や『解放』（大正八年六月創刊）の字が見られることから、少なくとも大正八年六月の時点までは草稿の修正が行われなかったと考えられる。つまり、芳三は大正九年の発表時に際し、新たに作られた人物として、その作品内における役割を考察する必要があるといえよう。

前述の草稿と決定稿のもう一つの違いとして、登場人物の名前が挙げられる。草稿において、「或る男」と「其姉」は各々「彼」と「病人」と言及されるのみであるが、決定稿では芳行と時子という名前が与えられた。この他、芳三をはじめ、豊子（妹）、正男・八重子（姉の子供）に名前が付与さ

れている。これに対し、家族以外の人物については、それが親族であるとしても、「F」「Tさん」「H」「U」などのイニシャルで提示されるのみである。

また、地名においても、兄や芳三が実際に赴く小豆島、赤城山、前橋以外に、兄と父との不和に関連して言及されるだけのW川沿岸やA鉱山などは、イニシャルで提示される。

これは芳三が、物語が成立する空間を意図的に〈家族〉―叔父などの親族も含まない「血すぢ」でつながったもの―及び〈家庭〉―直接的に父子不和や兄の家出などが起こり、姉が亡くなる場所―内に限定していると理解できよう。このように主要登場人物と物語の空間を限定することによって語り手が得られる効果にはどのようなものがあるだろうか。ここでは、芳三の語りによって作られる〈家族〉内の様々な構図を、より浮き彫りにする方法として捉え、次章につなげていきたい。

本作品は、分量からすれば、姉の死や兄と父の間の不和が物語の大部分を占めており、芳三が、この物語の伝達者であることは明らかである。しかし、芳三は【十七】において、「私は憶ひ浮ぶままに書きましたが、出来事の時間的順序が読者に少しはつきりしない気がして来ました。それ故、今簡単にこれまでの所を年順に繰返して置かうと思ひます」などと、「出来事の時間的順序」を「読者」（以下、別途の断りのない限り、語り手芳三の想定する読者を指す。）に改めて提示する労力を惜しまず、数種類のエピソードを「憶ひ浮ぶまに書」いている。言い換えれば、芳三が「読者」に伝えようとする物語に必要なエピソードを主観的に選択し、提示しているのである。このように、彼の語る内容はあくまでも彼の記憶に依存したものであり、多分に主観的であることが、次に挙げる文章からもうかがえる。

私の覚えてゐる最初の衝突は、兄が夏の休みに友達と奈良京都の旅行をするからと云つて父に旅費を貰はうとした時でした。（【四】）

此時の衝突などは中でも下らぬ衝突でした。（【十三】）

一方、芳三は作品全体を通して、「信じる」「信ずる」などの表現を繰り返し用いていることが確認される。次にその一部を引用する。

然し私は屹度兄は死んでゐないと信ずるのです。私には何故かさう信ぜられるのです。（中略）私もそれは信じます。（中略）祖母と兄との関係では妙にかう云ふ事が信じられるのです。（【一】）

後で思ふに、兄には私の話したい事も訊きたい事も総て分つて居たのかも知れません。それに違ひなかつたのです。（中略）然し兎に角、兄が無意義な生活をしてゐるのではない事は私は信じて居ます。（【四十】）

右の引用部の「それに違ひなかつたのです」などの表現も、「信じる」と同様の意味合いで使われていると考えられるが、

このような表現が芳三の語りには散見される。このように芳三は、物語の客観的事実ではなく、あくまで自分の「信じる」ことを語る、限定的な語り手であり、中立的な語り手ではない。そして兄と同様に、本作品の登場人物の一人でもある。したがって、芳三が語った内容だけでなく、彼の語り方そのものを小説の一部として読み解く必要がある。

芳三の物語が主観的であることに加え、本作品には彼によって意図的に省略される物語があることに注目したい。

芳三は、兄の家出後、再会するまでの期間について、「それからの永い年月に就ては、細々した事はありますが此所には書きません。姉の夫の失敗、私の結婚、赤児の誕生、さう云ふ事で、さした事もなく、九年経ちました。」と書いているのみで、詳述することはない。

また、直接引用の形で提示される兄の手紙では、「作者云ふ」という一文から始まる芳三のコメントが挿入されており、また、次のように手紙の一部が芳三の言葉に代替され、省略されるなどの干渉を受けている。

（兄は此外に尚祖母と両親とに宛てた手紙を書いてゐます。祖母には心配しないやうにと云ふ事を繰返し書いてゐました。（中略））【三十二】

また、兄と自家の女中との結婚をめぐる、兄と父との衝突も、省略される物語の一つである。この衝突は、本作品が父子不和を主題としたものであるならば、省略されてはならない内容という点で無視できない。

それから、父は様々な場面で兄と衝突し、本作品において重要な位置を占めている人物であるにもかかわらず、彼が亡くなった経緯については一切の説明が省かれている。これは、芳三が祖母の存命に触れ、次に兄が現われるのは祖母の亡くなるときであるだろうと予測していることと対照的である。このことも、仙田倫太郎が「姉の死から五年後に亡くなった父について一切の説明が省かれていることは致命的である」[12]と述べているように、父子不和を描いた物語として「致命的」であるとされ、先行研究では批判の素材となった。

しかし、前述したように、芳三の主眼が父子不和ではなく、それら事象に対する自分の感情や考え方を「読者」に伝えることにあるとすれば、これは「致命的」なものではなく、意図的なものであると考えるのが妥当であろう。

次章からは、芳三が物語の空間や登場人物を限定し、特定の物語を省略・編集する方法を通して、「読者」に伝えたかった物語について詳しく考察していくことにする。

二．芳三による線引きの意味するもの

本作品は、芳三が「読者」に向けて、主に兄と姉の物語を語る形を取っている。そのため、「或る男、其姉の死」というタイトルは、作者志賀が付したものでありながら、語り手の芳三によって付されたものとしても受け取れる。

タイトルに「或る男」（兄）と「姉」を出していることから、前述した杉山の先行論において「芳行と時子における生と死という構図」が提示されるように、先行研究では、対照的に描かれる二人の姿が屢々指摘されてきた。これに対し、本稿では、タイトルにおける「或る」「其」の意味に焦点を当てたい。芳三は、兄を「或る男」と、不特定人物として表わすことで、自分と兄の間に距離を置いている。また、姉を「其」男だけの姉であるかように表すことで、二人を括っている。これにより、彼らの弟であり、それを語っている芳三と兄、姉との間に線が引かれるのである。このような線引き、とりわけ兄と芳三の間の線引きは作品内でも確認される。

例えば、兄は姉の死を知り、「丁度ベツレヘムの星に導かれた東方の学者たちのやうに」やって来る。このように芳三は、兄と姉はお互い「心から親しむ事」があると述べている。しかし、彼らと芳三との関係性では、そのような精神的交感が語られることはない。これは後述する芳三の祖父に対する精神的交感とは対比的なものである。

本章では、芳三が語りにおいて、どのように線引きを行っているかを確認し、その意味を探りたい。

二．一．「血すぢ」へのこだわり

芳三の線引きは、彼の「腹異ひ」「血すぢ」への言及とも相通ずる面があると思われる。まず、本作品が「或る男と云ふのは私の腹異ひの兄です」という文章で始まっており、次のように繰り返し、そのことを強調していることに注目したい。

私はそれをいつてやりたかつたのですが、腹異ひといふ事と兄の出た後、私が自家の財産をつぐ事になつた事が矢張りこだはりになつて、何となく云ひにくい気がしたのです。（【三】）

芳三は兄と自分が「腹異ひ」であることを端的に提示している。また、本作品には、次のように、「腹異ひ」であるからこそ生まれる無理解も描かれている。

一つは八つで実母を失つた事が何時までも兄の感傷にからまりついてゐたからでもあつたやうです。（中略）が、それにしろ、兄には何か祖母だけでは満たされない気持がありました。そしてそれを兄は矢張り亡き母の幻影に求めていたのです。妙な事です。（中略）しかも、さういふ自身の態度が、愛を求める気持の変態的な現れだと云ふ事は兄には意識出来なかつたのです。（【七】）

芳三は、兄が父との不和を繰り返し、結局家出をするまで至ったのは、「実母を失つた事」に起因すると考え、実母から受けられなかった愛を、歪な形で父に求めるのは、「変態的」な気持ちの現れであるとしている。ここで、芳三は「妙な事」という表現を使っているが、これに類似する表現は、他の箇所でも見受けられる。兄が父について「常に挑戦的な

の」に対し、「それは不思議な位で」あり、「私に云はせれば幾らか強迫観念に近いもの」であると述べている。また、「変に執拗くな」り、父に「只無暗に楯突いて来る、何かしら気違じみた不遜な若者」として、兄を評価する場面も見られる。

このように、芳三が兄の行動に「妙に」「変に」などの無理解を示す表現を多用しているのは、芳行とは異なり、芳三自身には「実母を失つた」経験がなかったからである。前述した線引きとともに、これらの表現から、芳三と兄の間に埋められない溝が存在し、それは「腹異ひ」という点に起因していると考えられよう。

本作品における「血すぢ」への言及も目立つ。芳三は、兄と父は性格の面で「共通な物を持つて居」り、それは、「血すぢ」であるからだと述べる。同様に、「何といつても二人は肉親」であることも繰り返し提示される。また、芳三は兄の描写において、父と兄を重ねて描く方法を取っていることが次の文章からもうかがえる。

丁度兄が小豆島行の日に、自発的にはどうしても父を玄関まで送れなかつたやうに、父も気にしながら出かけられなかつたのではないかと思はれます。これが二人の性質でした。二人の関係に生じた共通の癖でした。【二十】

芳三は、兄と父とを重ねることで二人に共通点を見出しているのに対し、自身と父とを重ねることはない。

このように、兄と父は「血すぢ」「肉親」であることが強調されるのに対し、芳三自身が父の血を受け継いだことに触れる場面は見当たらない。つまり、彼は父から兄に継がれる「血すぢ」の系譜の中で、自らを外しているのである。

二．二．芳三と兄の異なる選択

芳三はこれまで見てきた線引きを基に、自身と兄の運命に対する姿勢も対比的に描いている。まず、兄の場合を見てみよう。

自分の運命が父の気持だけで支配されてゐると考へる事が一つは愉快でもなかつたのでせう。兎に角兄は現在の自身が厭で〳〵堪らなくなつたのです。【三】

理由にならない事が理由になつて自分の運命が左右される。此意識が変に兄を苛立たすのでした。【二十二】

兄は明ら様に不機嫌を現してゐました。自身の結婚がそんなにして、どん〳〵運ばれる事は兄には何か侮辱のやうにとれる風でした。【二十三】

芳三の眼に、兄は家出の前の時点において、すでに自分の運命（結婚）が他人、殊に父によって支配されることに反感を持っているように映っている。このような兄の態度を鑑みれば、彼が家出後にどのような生き方をしたのか定かではないが、家出することで他人からの束縛から抜け出したことは、

「よりよく生きる為め」の努力として受け取れる。

両親へはよりよく生きる為めにはこれが自分に必要なのだといふ事、そして家を私に継がす事に躊躇しないで貰ひたいと云ふ事、それから形式的には仕方がない迄も、それ以上に自分の跡は追求しないやうにと云ふやうな事が書いてありました（【三十二】）

また、芳三が兄の姉に宛てた手紙から決して短くない分量（【二十七】～【三十二】）を引用する中で、この部分だけは、何故か任意に省略する形を取っている点も看過できない。少なくとも芳三にとっては、兄の家出の理由が長々と引用するほど、重きを置くべき部分ではなかったのである。

一方、兄が個人の「よりよく生きる為め」の選択をしたのに対し、芳三はこのような兄の考え方を「強迫観念」と見做し、自身は父の意見にも、運命にも順応する姿を見せる。

物の傾いて行く時にそれを支へようとする力程に無益で、しかも苦しいものはありません。それ位なら、それを倒れるままに任して、更に新らしいものを築き上げるに如くはないと思つたのです。私は其頃未だ法科大学へ通つてゐたのですが、自分から結婚したいといひだしたのです。母は未だ早いと叱りましたが、反つて父が賛成して、間もなく父の選択で、私もそれを承知して今の妻を貰つたのです。兄の家出も結婚の問題がこじれたのが起りだつたから父もこりてゐたのでした。（【三】）

芳三は、結婚問題が決定的な理由となり、家出をした兄と対照的に、自分は運命に順応し、父の選択に従って結婚したことを示している。ここで結婚は、父や他の家族にとって、家出した兄の代わりに家を継ぐという意思表示として受け取れる、芳三としても家族としても重大な選択であったといえよう。

また、次の引用からもうかがえるように、芳三は、兄の家出という選択によって暗くなった家の雰囲気が、自分の選択により、明るく変わったことを仄めかすことで、自分の選択の正当性を示していると考えられる。

一家には急に暗い影がさして来たやうな気がしました。（中略）私の妻は気楽な子供のやうな奴です。此奴が入つて来て暗い家も幾らか明るくなりました。が、翌年女の子が生れると自家中の者が総がかりでする努力の何十倍かの力で今度はそいつが直ぐに自家中を明るくして了ひました。（【三】）

このような対比を補強するものとして、芳三における「喜劇」「悲劇」の意味も、彼の運命に対する態度が込められたものとして注目に値する。芳三は、もし兄が父の同意を得て結婚に成功していれば、それは「喜劇」であったろうが、その同意が得られず、結局家出という「悲劇」に至ったと捉えている。しかし、これまで見てきたように、兄の家出は「よりよく生きる為め」に自ら選んだもので、兄の立場から見た

時、その選択だけで「悲劇」と見做せる問題ではなかったのである。

これらに加え、芳三が兄と異なる選択をしたのが、兄が「精神的に眼ざめ」た時期と重なっていることを指摘しておきたい。

此兄は私が十八の暮れに自家を出て、それなり行方不明になつたのです。(【一】)

後年「ノラ」の筋を私に聴かして呉れた時、兄は此事を云ひました。それから、「兎も角、今まで子供だつた奴が十七八になると何かしら精神的に眼ざめて行く時だからね。その気持に余りに無理解に学生は只学生でゐればいいと云ふやうな事を云へば、云つた物の軽蔑されるのは仕方がないよ」とこんな事を云つて居ました。(【十】)

兄は芳三に「十七八になると何かしら精神的に眼ざめて行く時」であると話している。それを覚えていた芳三もまた、十八に、人生における重大な選択を下しており、その選択が、兄と対照的なものであったことは見過ごせない。

本章では、兄の家出という選択があくまで兄自身のためだけのものであり、一家を暗くする選択だったのに対し、芳三自身の選択はそれとは正反対のものであったことを「読者」に示すことで、自分の選択を正当化する芳三の姿が確認された。次章では、これまで見てきた線引きと対比的構図について、祖父という軸を中心に考察を深めることにする。

三．祖父の位置づけ

「或る男、其姉の死」における祖父の存在は、先行研究において研究の対象となることがなかった。確かに祖父は、本作品において、決して多くを占める人物ではない。祖父が登場するのは、主に【十一】【十二】である。この二章には、父と兄がW川沿岸の鉱毒事件で衝突したことの背景として祖父が登場する。【十一】では祖父の経歴が書かれており、【十二】では芳三から見た祖父の晩年が描かれるのみである。しかし、芳三の祖父への言及は、父子不和や姉の死などの大きな物語の流れからは、かけ離れた唐突な挿入である。何故このような挿入が必要であったのだろうか。

三．一．物語の新しい転換点

宮越勉は、「志賀直哉における父子対立の問題―『或る男、其姉の死』を中心に―」[13]において、「或る男、其姉の死」の構成を次の三ブロックに分けて説明している。

Aブロック　【一】～【四】前半及び【三十四】後半～【四十】

Bブロック　【四】後半～【十六】

Cブロック　【十七】～【三十四】前半

Aは兄の家出以後の時間帯であり、BとCはそれ以前の時

間帯である。本稿で注目したいのはBとCの境界である。従来の研究では、【十七】において、前景化する語り手が、「出来事の時間的順序」を「読者」に直接示す部分をもって、前後内容の分岐点として理解するのが通念であった。しかし、この部分を内容上の境界として理解するには疑問が生じる。

その理由の一つとして、「或る男、其姉の死」が新聞連載小説である点が挙げられる。大正九年一月六日から三月二八日まで、四〇回にわたって連載された本作品の【十七】が掲載されたのは、連載の半分以上が過ぎた二月二六日である。内容上は半分にも達していないが、新聞社側の都合で、直前の【十四】(二月一四日掲載)と【十五】(二月二四日掲載)の間に長い休載があったためである。

このような事情を鑑みれば、【十七】における「出来事の時間的順序」を示す部分は、この休載を意識した措置で、内容上の分岐点ではない。では内容上の分岐点はどこにあるのだろうか。本稿では、兄が心境的・行動的変化を見せる時点がこれに該当すると考え、論を進めることにする。ここで重要なのは、芳三が兄の変化と祖父への言及及び死の時点とを重ねている点である。

芳三は祖父の死が、兄と父の不和に大きく影響したことを、次のように直接的な形で提示している。

兎に角かう云ふ祖父が丈夫な間は父と兄との間もさう大した事は起らずに済んで居ました。然し祖父が死ぬと直ぐそれは下らぬ事で破裂して了ひました。(【十三】)

また、祖父への言及を前後に、兄の父に対する態度にも違いが見られる。

兄は【四】後半〜【十二】においては、父に対して「常に挑戦的で、強情」であり(【五】)、「乱暴な事を云」ったり(【七】)、「我を張つ」たりするなど、事ある度に父に歯向かっている。

しかし、【十三】〜【三十四】前半においては、「神経衰弱にかかつてゐるやう」(【二十一】)に、段々と父に直接反感を示すことなく、一人で呑み込む姿勢に向かっているのが、以下の引用部からも分かる。この変化は、その後の家出を決心するまでに至る変化として読み取れる。

然し兄は結局其怒りを父までは現さずに了ひました。(【二十二】)

いつもなら直ぐ一ト衝突なければならぬ所です。が、兄は珍らしく、それをしませんでした。(中略)然し兄はそれをも破裂はさせなかつたのでした。(【二十七】)

このような兄の変化は、芳三が祖父の死を機に、兄の態度から意図的に読み出そうとした変化であったことは留意しておくべきである。

これは正しく自分の弱い所から来てゐるのだ。(中略)何といふ弱さだ。何といふ恥知らずだ。こんな風に兄はそれを鼻先にこすられるやうに感じ出したのでした。

千代（其女中）との事が既にさうだ。徹底しよう〳〵としながら、弱さに支配されて其所に破綻を見せる。遂に自分は何事をも遂げ得ない人間かも知れない。……

（【十六】）

この引用は、祖父の死と兄の変化の時期を重ねる過程で、語り手が兄に内的焦点化する箇所である。ここで芳三は、意図的に自分の言葉と兄のそれとを見分けがたくすることにより、兄の変化を読み出そうとしたことがうかがえる。

次節では、祖父に対する芳三の態度を考察することで、芳三が祖父の存在と兄の変化を関連づけようとする理由を明らかにしていきたい。

三　二　祖父に対する「孫の贔屓眼」

次の引用部において、芳三は「孫の贔屓眼」をもって祖父に感情移入していることがうかがえる。

此時の祖父の気持を想ふと、どうにもならない淋しさを感じます。（【十一】）

然し祖父がそれを掛けて置いた気持は私共には何となくしつくり来ます。在り来りの句程反つて、それを使ふ人によつてはしつくり来るものです。（中略）孫の贔屓眼もあるでせうが、祖父には時々さう云ふ事がありました。

（【十二】）

このような芳三の祖父に対する寛大な態度は、前述した兄に対する無理解な態度とは対照的なものであるといえよう。また、芳三は祖父を描写するに当たって、その対比的な存在として父を描いている。

家長としての祖父の態度が実にそれでした。家中には何となく悠々とした気分がみなぎつてゐました。私共は祖父に死なれて返つて段々祖父をなつかしむやうになりました。一つは新しい家長なる父が、性格的に変に家人をおびやかす方だつたからでもありませう。（【十二】）

ここで、芳三は、家長としての祖父と父を比較しているが、このような描写は他の箇所でも見受けられる。

芳三は、祖父が「二宮尊徳といふ尊農家の弟子だつた」ことを挙げ、祖父自身と関わりのないことにも「冷淡で居られな」い、利他的で責任感のある人物として描いている。一方、父は、「札差し」をやっていたFを「明治の偉人の一人として」尊敬し、被害民の事情より、父自身にかかってくるだろう迷惑ばかり気にする人物として描かれる。「札差し」は当時の高利貸しのことであり、次に引用する「財産」に執着する父の姿とも関わるといえよう。

父はよく自家の為めと云ふ事を云ひます。然しそれは自家の財産の為めで、その財産は父が自分の仕事として作り上げたものですから、云ひ換へれば意識して居たか居ないかは別として、矢張り父一個の我執の為めと云つてそれは差支なかつたのです。（中略）所が、さうして貰

つた其遺族は生活の安定を得た事は感謝しながらも、十何年の間、あるものをも使ふ事が出来ず、苦しんで来た事を考へ、そして、其間に苦しいままに死んで行つた家族の事を憶ふ時、感謝ばかりもして居られない気持になるのです。(【六】)

芳三は、父が「自家」、つまり「自家の財産の為め」に行うことは、「父一個の我執の為め」であり、そのため、家族はそれに対して、「感謝ばかりもして居られない気持になるの」だと述べている。このように、芳三は、父を、家族より父個人の世間体や名誉のために「財産」に執着する人物として描き、それに対して反感を示している。

父のこのような面貌は兄も認識していたと見られる。兄は、自身の話を基に創作した「小説」の中で、父を「分らず屋の如何にも頑固な物質主義者」として描いており、これは芳三の父に対する否定的な認識に近いものだといえよう。

これまで考察してきた内容をまとめると、芳三は利他的で家庭に「悠々とした気分」をもたらす存在であった祖父には寛大で贔屓な態度を取っており、祖父を一種の模範としていたと考えられる。また、父をその正反対の人物として位置づけ、兄もまた父に関しては、芳三と近い認識を持っていたことが確認される。しかし、兄弟はこのように近い認識を持ち合わせていたにもかかわらず、以降、正反対の選択へと向かうことになる。兄は家出することで父との決別を選択し、芳三は父の「財産」を継ぐ選択をするのである。

三．三．交差する芳三と兄の運命

芳三は、元来、兄が受け継ぐべき「財産」を、兄が家出することによって、代わりに受け継ぐ選択をしており、その事実に拘泥していることが次の引用部からもうかがえる。

私はそれをいつてやりたかつたのですが、腹異ひといふ事と兄の出た後、私が自家の財産をつぐ事になつた事が矢張りこだはりになつて、何となく云ひにくい気がしたのです。(【三】)(再掲)

尤も其財産をそつくりうけついで相当の仕事をしつつある私がかう云ふのは少し変に聴える事で、父が生きてゐたら怒るかも知れません。(【六】)

芳三が父からの「財産」を受け継いだことに拘泥する姿は、二章で確認した、父から兄に継がれる「血すぢ」の系譜の中で自らを除外する彼の姿に重なる。このような芳三の拘りは、祖父を模範にして「悠々とした」家庭を築き上げたかったにもかかわらず、兄の家出によって、反感を覚えていた父の意に従い、そのあとを継ぐ選択を強いられた状況への後ろめたさがあったためではないだろうか。

このような芳三の後ろめたさに関連し、家出後の兄の「眼なざし」に対する描写は注目すべきであろう。

それは兄が家出をした頃のあの如何にも自信のないオド

〳〵した眼なざしではありません。私の全く予期しなかつたものでした。見すぼらしい姿、トボ〳〵した歩み、そんなものを超えた眼なざしでした。（【三十五】）

然し兎に角、兄が無意義な生活をしてゐるのではない事は私は信じて居ます。兄が又、どう云ふ姿で、そして、どう云ふ眼差しで再び私共の前へ現れて来るか、それは私にとって或る真面目な期待となつて居る事です。（【四十】）

兄の眼は家出後の兄が「無意義な生活をしてゐ」なかったと芳三に信じさせるものであり、その後の兄の「よりよく生きる為め」の努力に対する「或る真面目な期待」を持たせるものであった。これは芳三が、祖父は「静かでゐて、力のこもつた」「大変いい眼を持つて」おり、それは、「孫なる私にはいい感じを残して」いると述べていたことに重なるものである。

ここに「或る男、其姉の死」を〈執筆〉した芳三の動機を見出すことができる。芳三は、父の「血すぢ」として彼に似ており、個人の目的のために家出に至った兄に代わって、より利他的で家族のための選択をした。しかし、それは結果的に「贔屓眼」を持って、模範としていた祖父ではなく、反感を抱いていた父とその「財産」を継ぐことであった。そんな彼の前に、父も祖父も亡くなった今、兄が現われたことで、芳三は父を継ぐ選択をした自分への後ろめたさから、兄と生前の祖父との「眼なざし」を重ねているのである。このような認識から、彼は「腹異ひ」を繰り返し強調し、執拗に「血すぢ」の系譜から自らを除外させることで、父と兄を結びつけようとしたのであり、運命に対して兄とは正反対の選択をしたことを正当化させる語り方をするに至ったのである。

四．語りにおける姉の位置づけ

本作品のタイトルにおいて、兄とともに一つの軸を成す姉は、芳三の語りにおいて、どのように表されているのだろうか。まず、姉も兄同様、芳三とは「腹異ひ」として、父の「血すぢ」を継いでいる点が強調される。

父も姉も兄も決して悪い人間ではありません。（中略）私は三人の性格を思ふと、さすがに血すぢだと思ひます。よくも共通な物を持つて居るものだと云ふ事を考へさせられます。只異ふ所は時代と境遇とです。（【四】）

姉の血を継いでいる姉の息子に対しても、「その何となく険しいやうな眼差しが矢張り私共一家の―と云ふより私の父の血をうけて居る事を示して居ました」と、わざわざ、「私共一家」ではなく、「父の血」を受けていると言い改めることで、「血すぢ」を想起させている。

一方で、病床にいる姉は、「黒光り」「一寸死人が寝てゐる時のやう」「既に黄泉のやう」「無限の闇」などの「暗い」イメージの中に描かれている。また、姉はその良人や良人の家

族から、始終、冷遇されていることもうかがえる。

私は姑や義兄の話ぶりが幾ら意識が不明であるとしても、其本人を前にして云ふには余りに傷々しい事を平気で云ふには閉口しました。そして余りに執着なく死を決め込んでゐるのが不愉快でした。【三十七】

兄の頬にも涙が流れてゐました。私も泣きました。只良人だけが其中で泣きませんでした。（中略）葬式は翌日の午前中にする筈で、然し死体は今夜の中に棺へ納める事に義兄は決めてゐました。【三十九】

これらの描写は、「何処か昔気質の女」である姉が、「実はさう良人から愛されても居なかつた」のにもかかわらず、「別れて帰る」ことなく、良人のもとに残るという選択をしたのに対する「暗い」結果であることを示している。これを裏付ける内容として、姉が良人と信州の寒村に行かず、父に従う選択をした場合について、芳三は次のように想像している。

私は若しも同じ死の床を赤坂の赤十字病院の病室のやうな所で見出したとすれば死の恐ろしさを此半分にも感じなかつたかも知れません。（中略）所が此所では何一つさう云ふものはありません。

それから、芳三はこのような姉の「暗い」結果をもたらした姉の性質の根元について次のように述べている。

十か十一の時に実母を失つた姉はいい人ではあつたが、矢張り何処かひねくれた性質を持つてゐたのです。祖母の愛は専ら兄の方に傾いてゐましたし、だれからも本統に愛されてゐなかつた姉は妙に邪推深い所もあつたのです。【三】

芳三は兄同様、姉の「ひねくれた性質」が「実母を失つた」経験に起因することを挙げ、以後、「暗い」死という否定的な結果に導いた根本的な原因はその経験にあると仄めかしている。

これまで父子不和の物語と姉の死は関連性が欠如していると評価され、十分に理解されてこなかった。しかし、本作品を芳三の語りを中心に読み直したとき、彼が「腹異ひ」「血すぢ」への拘りを基に、自分とは対照的な選択をした兄と「其姉」の姿を描く物語の一部として統合されるのである。

おわりに

本稿で見てきたように、「或る男、其姉の死」は芳三の主観的な物語、その中での意図的な編集と省略という方法を通して、芳三が自分自身を兄とは対照的な人物として位置づけていることが確認できた。また、イニシャルの使用により、物語が行われる空間を〈家庭〉内に限定することによって、〈家族〉に見られる様々な対比が、より浮き彫りになったといえよう。

また、父子不和とその結果としての兄の家出、姉の「暗

い」結末は、分離された形ではなく、芳三が兄や姉の生き方と対比的である自分の物語を「読者」に提示するにあたって、適宜用いた題材として共に取り扱う必要がある。ここに、従来の研究では重なることがないとされてきた、父子不和と姉の死という二つの物語を貫く一つの軸として芳三の語りが浮上する。「ある男、其姉の死」は、以上の方法を通して見出される、芳三の選択とそれに対する後悔の念を描いた物語として読めるのである。

注

（1）連載当時の原題は、「或る男と其姉の死」であったが、短編集『雨蛙』（大正一四年四月、改造社）に収録される際に、現行のタイトルに改められた。

（2）志賀は、他の文章においても、『和解』と「或る男、其姉の死」の関連性について度々言及しているが、「細川書店版『或る男、其姉の死』あとがき」（細川書店、昭和二一年一二月）において、「或る男、其姉の死」は、『和解』と「対」になる作品である直接的に言及し、「『和解』を書いた私としてはどうしても、これは書かねばならぬものだった」と述べている。

（3）岩波書店、昭和二年一二月

（4）「志賀直哉『或る男、其姉の死』論―『事実と作り事との混合』という方法をめぐって―」、『広島女子大国文・第一七巻』、平成一二年九月

（5）須藤松雄『志賀直哉の文学』、桜楓社、昭和五一年六月

（6）「志賀直哉論『和解』と『或る男、其姉の死』」、『広島女子大学文学部紀要・第一二巻』、昭和五二年三月

（7）「『或る男・其姉の死』の問題」、『女子大国文・第五三巻』、昭和四四年五月

（8）「『或る男、其姉の死』論―『或る男』という枠組」、『文藝と批評・第七巻第七号』、平成五年五月

（9）芳三の語り手としての機能については、柳澤広識が「志賀直哉『或る男、其姉の死』論―継承と逸脱―」（『文学研究論集・第五一巻』令和元年九月）において整理しているが、例えば、仙田倫太郎は「『或る男、其姉の死』論」（『徳島文理大学文学論叢・第二六巻』、平成二一年三月）において、「『弟』という語り手をあえて設定して兄の反省を描いたこと、さらに兄自身の手紙を用意したことを考えるとき、そこに『中』と『外』から『反省』的に自己を映す試みがあったことは疑えないだろう」と述べており、弟の設定の必然性を語っている。

（10）「志賀直哉『或る男、其姉の死』論―『小説家』の死／『小説家』の誕生―」、『二松学舎大学論集・第四一号』、平成一〇年三月

（11）夏目漱石から武者小路実篤を通して、「東京朝日新聞」に連載小説執筆を勧められた時点である。

（12）「『或る男、其姉の死』論」、『徳島文理大学文学論叢・第二六巻』、平成二一年三月

（13）『文芸研究・第四八巻』、昭和五七年一〇月

※「或る男、其姉の死」及び志賀直哉の随筆、雑纂等の引用は、『志賀直哉全集』（岩波書店、昭和四八年～昭和四九年）に拠った。

※【　】内の数字は、「或る男、其姉の死」における章番号を指す。

※本文における傍線は全て稿者が付したものである。

（ゆんみら／本学大学院博士後期課程）